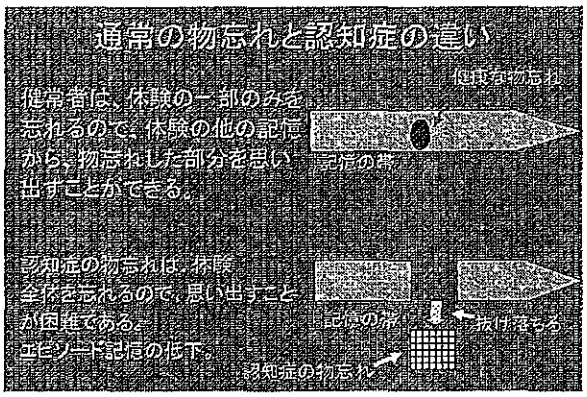
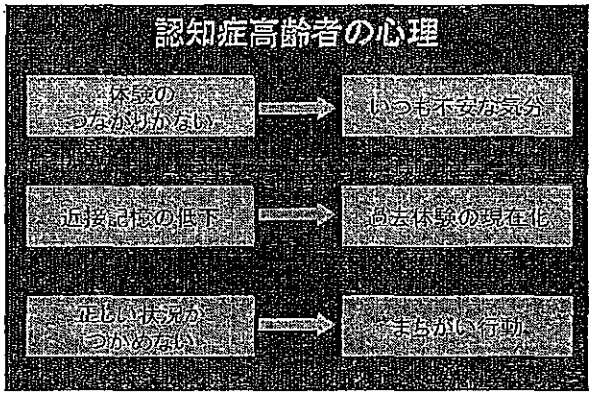
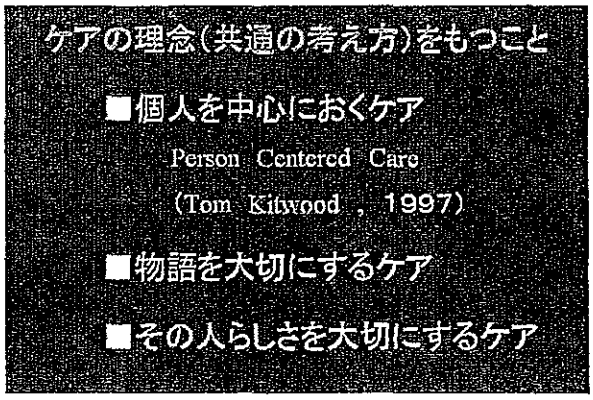
認知症との間に軽度認知障害という状態があると最近言われています。これは物忘れが年齢相応より少しひどくて本人も自覚して、周りからも物忘れがひどいといわれているけれども日常生活には支障がないので認知症ではない。しかしリスクの高い方なのです。こういう方に対して予防対策をしていくというのがひとつの課題です。





普通の物忘れというのは体験の一部を忘れているだけですから過去現在未来という体験と記憶の流れが続いているわけですが、認知症の場合は体験全体を忘れてしまう。たとえば、結婚式に出席したこと全体を忘れてしまうわけです。そのために認知症の人は現在そこにいること自体に不安感を覚えるということになります。 認知症高齢者の心理は体験のつながりがないからいつも不安な気分でいます。だから一番大切なことは認知症の方の不安感をなくしてあげる、「だいじょうぶですよ」ということを言ってあげるとか、声をかけてあげることが大切なことです。それから近接記憶というちょっと前の事を忘れてしまいますが、過去の体験が現在あるかのように押し寄せてくることがあります。そのため混乱するわけです。それから、正しい状況がつかめないため、しかも何とかして生活に適応しなければいけないという努力をするためにかえってそれがうまくいかなくて間違い行動がおこる。たとえば徘徊とか、攻撃的になるとかということが起こってくるわけです。



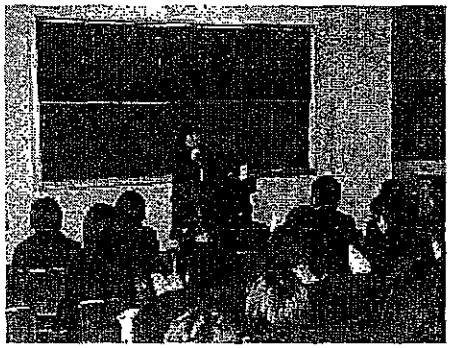
ですから、ケアの中心理念というのは、こちらの都合でやるケアではなくて、その人の心の世界を理解するケア、そういうことが大切です。一人一人物語を持っているわけです。ことに高齢になると自分自身の物語をいつも自分に言い聞かせながら暮らしていくということが起こるかもしれない。それくらい周りとの情報が絶たれてしまう、そういう世界に入るかもしれないのです。そういうときにその人の物語を大切にするということが尊厳を支えるケアであろうと思われます。その人らしさを大切にするケアということになります。これは決して介護の専門家に求められていることではなくて、できるだけの事をしようという多くの人たちの支えの共通の理念ではないかと思います。

認知症サポーター100万人キャラバンに向けて
認知症講座デモンストレーション

近江八幡市健康推進課　森村敬子

従来から、自治会単位、老人クラブなどで啓発活動を行ってきました。昨年は10ヶ所の企業と学校でも認知症講座を開催しています。認知症の一般的な知識にプラスして受講者の関心に対応するように留意しています。

対象	受講前の意見	講座のポイント	受講後の感想
製造業	・両親が認知症になったらさっぱり予測がつきませんよ ・たぶん介護しなければならないだろうし仕事は続けられない	・初期対応が天下分け目 ・診断を受けて病態に応じた適切なかかわりを ・介護サービスの使い方	・原因疾患がある病気だ ・「かかわり方」が大事だ ・今後の生活の不安が軽減 ・職場開催で参加しやすい
消防署、警察	・徘徊、被害妄想、物取られ妄想などで日常対応が多い。 ・救急対応時、パトロール中に困っている経験がある	・まず安心できる雰囲気を作る ・声のトーン抑え目に ・「どこから来たの」「名前は」と詰問ではなく、話を合わせて	・救急現場では家族も興奮している。自分たちが正確な知識で対応しなければ ・関係者との連携の必要
金融機関	・「通帳をなくした」、私のお金がなくなったと言う方も ・事務的に対応してトラブルに	・コミュニケーションのとり方 ・権利擁護、個人情報保護も ・自分の機関だけでなく連携を	・事務的な対応を改めよう ・「説得より納得」 ・周囲の対応や環境が大切
学校	・高齢者のことを理解できない ・高齢者は無用な存在だ ・不安定な思春期に祖父母の認知症が受け入れられない ・両親が介護に手いっぱい	・理解することは、自身を助けることにもなる ・子ども達のサポート、また人権教育の視点でも先生方が認知症を理解することは重要	・周りの人の接し方で認知症の人もいろいろできる ・自分たちも考えなければ ・介護の仕事につきたい



（参考）講座風景

認知症サポーター100万人キャラバンについて

◆認知症の方々を有形無形にサポートする認知症サポーターを、5年で100万人育成することが目標です。

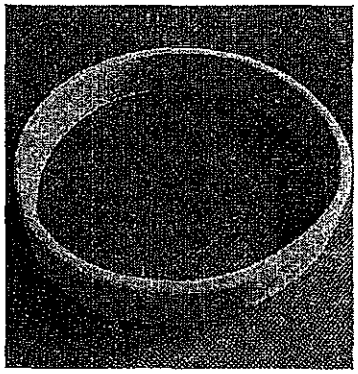
◆認知症サポーター講座は、認知症の方へのそのとき、その場所に応じた対応の方法や接し方を地域の実情を踏まえて実践へとつなげる講座です。

◆講座を受講した人が「認知症サポーター」となります。

◆認知症サポーター講座は、地域住民と、警察や郵便局、銀行、スーパーマーケットなど日常生活と直接かかわる企業団体への展開も予定しています。

◆認知症サポーター講座を受けた方には共通のブレスレットを贈呈します。

◆腕につけたブレスレットが「認知症の方のためにお手伝いします」というメッセージです。



◈第2部　キャンペーン　キック・オフ　イベント

1．＜地域活動報告①＞「みんなでつくろう！ひとにやさしい川崎のまち」

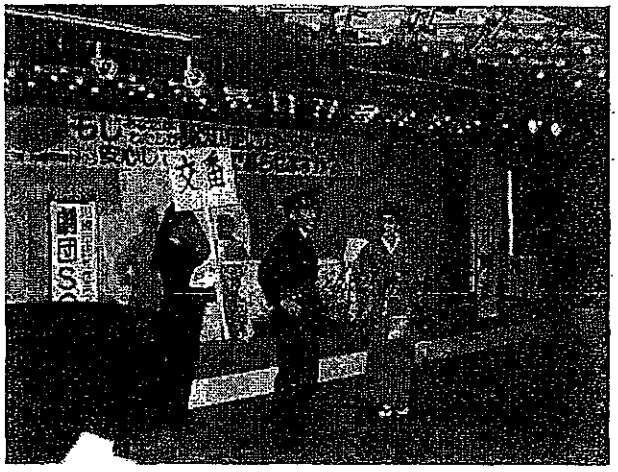
（神奈川県川崎市/市民団体）

「劇団 SOS（川崎市認知症ネットワーク）」による認知症寸劇上演

たとえ認知症になっても、介護する日々でも、一人の人間として、社会の一員として社会の中で堂々と暮らしていきたい！自分たちから町に出て行こう。孤立している人にはメッセージを伝えよう･･･一人で悩まないで！と。生活の場、地域で理解者を増やしていこう。介護の現場の声の出せない小さな声に向き合っていこう。

わが町で堂々と暮らしたい。それには認知症に対する正しい地域社会の理解、徘徊や介護への地域の見守り、協力が欠かせません。町の中で、地域で、全市的規模でセミナー、講演会、寸劇上演などの啓発活動を展開してきました。今日は全市11団体選りすぐりの名優の迫力ある演技をお楽しみに。

トラブル発生
（本人の気持ちに沿った対応を）



徘徊しても
（おまわりさんが親切に対応）

2. ＜地域活動報告②＞

「『もの忘れ散歩のできるまちほんべつ』をめざして」

（北海道本別町/自治体）

■「認知症高齢者を地域で支える仕組みづくり」

平成11年度から取り組む。行政、医療機関、介護サービス事業者の連携を図り、住民との協働事業を展開しながら推進している。

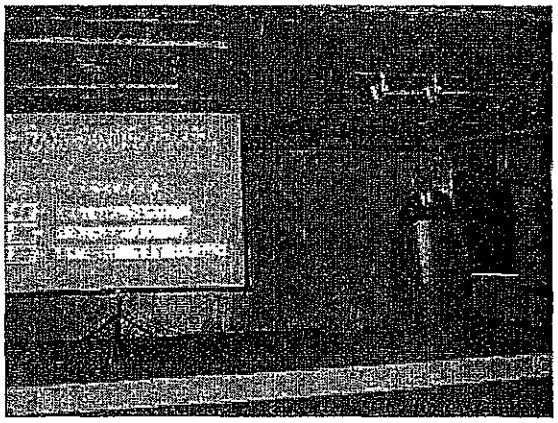
■「介護劇」

言葉や文章では分かりにくい認知症高齢者のケアを、劇を通して住民に伝えている。平成12年から実施。観客動員数は約400人。

介護劇は毎年住民や介護サービス事業者の参加をいただきながら上演しているが、今回（平成16年度）は、総合的な学習の時間とタイアップし中学生にも参加をいただいたことが新たな試みである。

■「やすらぎ支援事業」

平成14年度より、地域住民が担い手となって、認知症高齢者の見守りサービスとして実施。



「一万人が家族の地域ケアシステム」

町民や高齢者の参加と連帯による福祉の町づくりの推進を、町長自ら説明。

介護劇
やすらぎ支援事業
の紹介